

学校経営推進費 評価報告書（2年め）

1. 事業計画の概要

学校名	大阪府立堺支援学校		
取り組む課題	児童生徒の自立支援 児童生徒の学力の充実		
評価指標	1 視線入力装置を扱える教員数の向上。 2 視線入力装置を用いたアセスメントの活用率の向上。 3 児童生徒の発達を支援する学習ツールとしての活用率の向上	⇒	① 視線とパソコンの連動性の認知 ② 視線入力とパソコン画面（ソフト）の関連性の認知 ③ 意思伝達可能児の発掘・育成等
計画名	「重度肢体不自由（発話が困難）の視線入力装置を活用したアセスメントの充実とコミュニケーション力の向上」		

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	1 教職員の資質向上を基とした学校力向上 (1) 児童生徒が有する力の客観的評価と、それに基づく指導体制の構築。 ウ 視線入力システム導入による、児童生徒のコミュニケーション力向上への取り組み。 ※ 教育環境の改善を試みると共に、視線入力システムによる指導プログラムを作成する。
事業目標	1 視線入力装置を児童生徒のアセスメント（視野・眼球運動等）に活用することで、本校の自立活動領域のアセスメントでの課題の検証に活かし、実態に応じた合理的配慮を整え、適切な指導を行う。 2 視線入力装置の仕組みや使い方を学び、学習ツールとして活用することで、自己表現力を育み、コミュニケーション力を向上させ、将来の自立と社会参加に向けた学びの充実を図る。
整備した 設備・物品	視線入力装置一式 ノートパソコン：Windows10 Pro (i5/8GB/500GB) (3) 視線検出装置：tobii PC Eye Mini (3) 視線入力ソフト：tobii communicator 5 (1) 視線分析ソフト：tobii Gaze Viewer (3) ノートパソコン用固定具：パソッテルH型ノートPC用Bタイプ (3) 外部コールド：Eye コールド (3)
取組みの 主担・実施者	主 担：視線入力活用機器推進プロジェクト（指導教諭1名、リーディングスタッフ1名、自立活動専任スタッフ3名、自立活動分掌部員1名） 実施者：全教員の6割程度（学習ツール活用率）9割程度（アセスメント活用率）を予定
本年度の 取組内容	〈環境整備〉 ・ 視線入力装置にソフトや周辺機器を追加し、対象児童生徒の障がいに応じた効果的な指導ができるように整えた。 【追加ソフト】センサリーアイ・Drop Talk Windows版 【追加機器】抱っこスピーカー（ハグミー）・ディスプレイ

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習ステップ表及び評価表の見直しを行った。指導者が記録しやすく、共通理解できる学習レベルの状態（段階）を明確にすることで、継続した指導が行われるようにした。また、全国肢体不自由研究協議会において他府県の教員や視線入力を実践されている大学教授への参考資料として配布を行った。 <p>〈校内支援・研修〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 校内自立活動研修による視線入力装置の周知と理解推進。 ・ （自立活動部員による研修 1 回/視線機器の専門スタッフによる研修 1 回）専門スタッフによる研修でインストールされているソフトの使用方法を具体的に説明を受けた。自立活動部員による実践体験を行った。 ・ 自立活動部員による活用事例報告会。 ・ スーパーバイザーによる授業支援及び ICT 研修。 <p>〈保護者への発信〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「自立活動だより」において、保護者への情報提供。 ・ 授業参観での児童生徒の使用状況の報告。 <p>〈地域支援〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他の支援学校への視線入力装置の情報提供及び支援を行った。 ・ 学校運営協議会で視線入力装置の活用状況について授業見学を行った。 ・ 関係施設からの見学者へ視線入力装置の効果等について説明を行った。 ・ 福祉秋祭りにおいて卒業生対象に視線入力装置の実践を行った。 ・ 校外で視線入力装置の研修講師を行った。 <p>〈その他〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全国肢体不自由研究協議会での視線入力装置のポスター発表を行った。 （表題『視線入力装置の獲得から児童生徒の支援に至るまで』）
<p>成果の検証方法 と評価指標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 視線入力装置を扱える教職員を 20%以上にする。 2 視線入力装置を用いたアセスメントを対象児童生徒の 40%に実施することをめざす。 3 視線入力装置を用いた学習ツールとしての活用率。 ①視線と連動性の認知 ②視線入力と PC 画面（ソフト）の関連性の認知 ③対象児童生徒の意思伝達能力を評価し、その能力の向上を図る（3-①41% 3-②16% 3-③3%）
<p>自己評価</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 自立活動部全体で研修や授業等への支援を行った。一緒に授業を行ったり、対象児童生徒の担当が変わったりすることでさらに扱える教職員数は増えた。また、視線入力装置を扱える教員の増加により、活用率も高まってきている。『視線入力装置』の研修への参加率は今年度も高く、視線入力スーパーバイザーによる研修には、32 名の参加があった。活用事例報告会と兼ねることでより教職員への理解が深まった。機器購入会社のコミュニケーション担当者による研修では、視線入力装置を使ってソフトの機能性を紹介し、視線入力装置の優れたポイント等を教職員に周知することができた。 （目標 20% < 達成 28%）……………（○） 2 対象児童生徒の 40%にアセスメントを実施することをめざしていたが、アセスメントの実施に引き続いて授業を行った児童生徒が多かったため、アセスメント数が伸びず、目標達成に至らなかった。 （目標 40% > 達成 28%）……………（△） 3 視線入力装置を用いた学習ツールとしての活用率 ①視線と連動性の認知 ②視線入力と PC 画面（ソフト）の関連性の認知 ③対象児童・生徒の意思伝達能力を評価しその能力の向上を図る …………… 3-①72%（◎） 3-②52%（◎） 3-③4%（○）

次年度に向けて

- ・ 3年めは、今年度同様に視線入力を扱える教員と一緒に学習を行う教員に直接支援を行うことで更に視線入力装置を扱える教員数を増やしていく。また、情報処理部と業務を連携していくことで、ソフト面を強化し情報処理部での指導者の育成も行っていく。
- ・ 対象の児童生徒は25名に留まった。しかし、アセスメントだけではなく、学習ツールとしての活用が増え、内容的には充実した指導が行えた。文字学習へとステップアップできた児童もいたことから、購入したソフトを活用して意思伝達が可能となる児童生徒の率を増やしていきたい。